



黒鋼の執念

『残照』

【ライバルと宿命の対決！♡】

メカアクション特化！

ネオ・テラン同盟のエース VS 白銀の戦乙女！

【オルガエンジン】シリーズ

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L

黒鋼の執念

『残照』



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系
ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ
「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ_L

第3章:混沌の歌声

聖暦2025年5月初頭。

中央アジア、第14工業区。

錆びた鉄骨が巨大な肋骨のように天を突き、油に汚れた水面が赤銅色の空をドロリと反射している。

回想の静寂を切り裂いたのは、電子回路の悲鳴だった。

先ほどまで鼓膜の端で蠢いていた微かな予兆は、今や精神を内側から掻きむしるエコーズの「歌」へと変貌している。

それは戦場を制御不能な渾沌に塗り潰していた。

歌声は通信網を侵食し、連合の無人機ハウンドたちの敵味方識別を完全に破壊する。

互いを敵と誤認したハウンドたちは、汚泥に塗れた触手マーメイドに絡み取られながら、同士打ちのレーザーとミサイルを無差別にバラ撒き合っていた。

「——各機、アイアン・トライアングルを維持しろ！ 距離を空けるな！」

レイスの指示に対し、通信回線から返ってきたのは激しいノイズと部下たちの悲鳴だった。

『……っ、隊長……ノイズが！ 視界が……クソ、識別が赤一色だ……ッ！』

『マーメイドだ、下から来るぞ！ 離れろ、巻き込まれる……あ、あああああッ！！』

死と隣り合わせの傭兵稼業を生き残り、レイスの背中を預かるまでに至った歴戦の精鋭たち。

彼女たちでさえ、異常なノイズが生み出した渾沌には抗えなかった。

一瞬で呑み込まれ、レイスが5年の歳月をかけて完成させた鉄の陣形は無残に引き裂かれていく。

「各機、狂ったハウンドを近寄らせるな！ 無様に堕ちることは私が許さない。自分の身は自分で守れ！」

レイスは咆哮し、愛機の右腕に懸架されたスナイパー・ガトリングで電熱化学弾を掃射した。

圧倒的な初速が暴走するハウンドを粉碎し、運河の汚泥を爆炎で沸騰させる。

だが、部下たちの応答はすでに途絶えていた。パノラマモニターの端で、彼女たちの機影が煤煙の中へと消えていく。

守る者のいなくなった戦場で、爆炎を物理法則を嘲笑う速度で縫い抜ける白銀の残影があった。

「.....来たな、白銀ッ！！」

瓦礫を盾に地表スレスレを滑空する機体『セラフィム』。

イラストリアスは最短距離でタイラントの装甲の『隙間』を正確に穿つべく、動いていた。

あえて敵味方が入り乱れる最激戦区を、低空で突破してきたのだ。

五年前、レイスを路傍の石として踏みにじった圧倒的な高潔さ。

それは今や、戦場を切り裂く凄絶な殺気へと変貌している。

『.....退きなさい。邪魔をするというのなら.....救済するのみですわ！』

イラストリアスの右腕、30mmプラズマ炸薬ガトリング『パージファイア』が咆哮を上げた。

プラズマ圧によって音速を遥かに超え、圧倒的な運動エネルギーを纏った純粋な質量弾（徹甲弾）の雨が、レイスの愛機へと殺到する。

だがレイスは回避機動を捨てた。

タイラントの正面装甲を重点的に増圧した『黒鋼複合装甲・改』を盾にする。

文字通り被弾を無視して、一直線に突っ込んだのだ。

凄まじい衝撃波と熱量が装甲を叩く。

その殺人的な運動エネルギーの余波はすべて、オルガ・システムを介してパイロットの神経へと逆流した。

「っ、ぐううう……ッ！」

コックピットの中で強烈な絶頂の波が弾け、レイスの肉体を乱打する。12cmの特注デバイスが狂ったように粘膜を蹂躪した。

だが、レイスの目は死んでいなかった。

彼女は奥歯を噛み砕くほどの殺意で、脊髄を灼く快楽を強引にねじ伏せる。

全身を焼き尽くすような嬌声を喉の奥で殺し、分厚い装甲ごと白銀の機体へと強引に肉薄した。

「来るか、聖女様.....ッ！」

レイスは左腕の「超振動チェーンソード」を起動し、抜刀と同時に振り下ろされるセラフィムのプラズマブレードへと自らその鋸刃を叩きつけた。

ギギ、ギギギギギッ！！

物理的な刃とエネルギーの刃が噛み合う不快音が響く。

高速回転する鋸刃がプラズマの磁場を掻き乱し、行き場を失った熱エネルギーが四散した。

タイラントの全推力を乗せた大質量の一撃。

物理法則と兵装の相性に従えば、軽量のセラフィムはプラズマ刃を散らされ、瞬時に弾き飛ばされているはずだった。

だが、白銀の機体は一步も後退しなかった。

機体各所の緊急姿勢制御スラスターが、絶妙な推力で火を噴く。

イラストリアスは莫大なオルガ出力を注ぎ込み、霧散しかけるプラズマの刃を強引に縛り上げた。

そうして、タイラントの突進を真っ向から受け止めてみせたのだ。

『.....そのような野蛮な鉄塊で、わたくしに届くと思っているのですか?』

通信越しに響くイラストリアスの冷徹な声に、わずかな不快感が混じる。

それはレイスの攻撃が通じたからではない。

白銀の腕を伝わって神経に流れ込む高周波の振動ノイズ。

それが彼女の脳内でエコーズの歌声と共鳴し、頭蓋を内側から削るような頭痛を走らせたからだ。

その刹那、激しく削り合う刃の干渉から弾けたプラズマの強烈な閃光が、五年前と同じようにレイスの視界を白一色に塗りつぶす。

モニターのホワイトアウト。

網膜を焼く光。

それはかつて、彼女が何もできずに焼かれ、すべてを失った敗北の記憶そのものだった。

だが——今の彼女は、怯まない。

「熱いか？ 痛いか？私は、この痛みを五年間待ち焦がれていたんだよ！！」

凄まじい輻射熱がフレイムを伝わり、レイスの肌を焼く。

その熱痛が首筋の傷跡を疼かせ、彼女を狂氣的な覚醒へと導いた。

『.....狂人が。自らの神経を快楽と苦痛で焼いてまで、わたくしを泥に引きずり下ろしたいのですか！』

至近距離の接触通信（スキン・トーク）越しに、イラストリアスの軽蔑に満ちた声が響く。

「あはっ.....当然だろ！ お前のその高潔な羽を筆り取って、私と同じ絶望（システム）の底に沈めてやるッ！」

『穢らわしい.....ッ！ その妄執ごと、ここで完全に灰へとお還ししますわ！』

圧倒的な格上の前に、わずかでも隙を作るため。

彼女は自らシステムのリミッターを外した。

致死量の情報フィードバックを脳髄へと招き入れる。

前後からレイスを貫くデバイスが、限界駆動の振動を刻む。

大量の愛液を撒き散らしながら、彼女の奥底を極限まで抉り抜いた。

「あ、ああッ！！ もっと.....出力を、熱を寄越せえッ.....♡♡」

よだれを垂らし、白目を剥きながらも、レイスは狂ったように操縦桿を押し込んだ。

だが、どれだけ快楽を対価に支払おうと、機体性能と操縦技術の絶対的な壁は覆らない。

システムに宿命の「0.8秒のシャットダウン」が訪れた。

脊髓を灼く猛烈な多重絶頂。

機体制御が完全に離れる。押し込んでいたタイラントの全推力が唐突に消失した。

レイスの肉体が絶頂のあまりビクンと跳ねて硬直したのだ。

五年前と同じ、絶対的な空白。

白濁する意識の中で、彼女は自らの死を悟った。



『.....お逝きなさい』

拮抗していた推力が突如ゼロになる。

その死命の隙を逃すはずもなかった。

イラストリアスは交刃のベクトルをずらし、推力を失ったレースの巨体を泥濘へと強引に叩き伏せる。

無防備に仰向けとなったコックピットを両断しようと、レイスに覆い被さるようにホバリングするセラフィムのプラズマブレードが高く振り上げられる。

だがその凶刃がレイスに届く寸前、戦場の渾沌が、気まぐれに聖女の足を引いた。

『——Hostile Detected』

無機質な機械音声と共に、レイスの死角から暴走した一機のハウンドが躍りかかったのだ。

標的はレイスではなく、刃を振りかぶるセラフィムの右側面だった。

不意の激突。

数十トンの重圧が白銀の機体を大きくよろめかせ、その姿勢を運河の泥濘スレスレまで強制的に押し潰す。

さらに、水面下で待ち構えていた巨大な触手マーメイドが迫る。

隙を晒した白銀の脚部をすかさず捕らえ、ドロリとした汚泥の中へと強引に引きずり下ろした。

『なっ……！？ 離れなさい、この不浄が……ッ！』

イラストリアスは咄嗟に、ブレードを発振する左腕で絡みつく触手を斬り払おうとする。

だが、機体のバランスを立て直す要となる右腕が動かない。

のしかかってきたハウンドの巨大な質量に、完全に抑え込まれていた。

戦場のノイズが生み出した、ほんの一瞬の「詰み」の形。

運命が、レイスに気まぐれな微笑みを向けた瞬間だった。

0.8秒の空白から覚醒したレイスは、絶頂の余韻で全身をガクガクと痙攣させながら、肉食獣のように口角を釣り上げた。

「……仲良く串刺しになりなッ！」

彼女は恐怖や快楽の余韻に吞まれることなく、その「泥まみれの好機」を即座に殺意へ直結させた。

白濁する視界のまま、敵の影を鋭く睨みつける。

その視線誘導と連動し、クリトリスに埋め込まれた戦闘用制御チップ（C-チップ）が励起した。

ターゲット・ロック完了を告げる微弱な電撃が、最も敏感な肉の芯をチリッと灼く。

その局所的な痛覚と快楽が入り混じる痺れを絶対的な照準の合図（トリガー）とし、レイスは左肩の57mm超高速徹甲砲の引き金を強引に引き絞った。

ズドンッ！！

凄まじい反動が、タイラントの巨体を泥の中に沈み込ませた。

完璧なタイミングの狙撃ではなかった。

だが、放たれた翼安定徹甲弾は拘束具と化したハウンドの胴体を紙細工のように貫通する。

そして減衰なき運動エネルギーのまま、セラフィムの右肩へと吸い込まれた。

轟音。

鋼鉄が引き千切られる悲鳴。

白銀の装甲が砕け散り、主兵装『パージファイア』ごとセラフィムの右腕が根元から無残に弾け飛ぶ。

その直後だった。

大口徑砲の殺人的な反動が、システムを逆流する。

それは最後にして最大の絶頂となって、レイスの肉体を打ち据えた。

強烈な快楽に視界が白濁していく。

だが、レイスは決してモニターから目を逸らさなかった。

彼女が絶頂に打ち震えるその視界の先で、火花を撒き散らす右腕が、運河の汚泥へと虚しく沈んでいく。

『——あ、っ……あ、ああああッ！ ……わたくしが、このような……汚濁に沈むなど……ッ！！』

通信越しに響く、かつての高潔な聖女の悲痛な叫び。

重心を完全に失ったセラフィムの巨体が、水面へと絶望的な角度で傾いだ。

鉄の墓標として泥の底へ没する寸前の刹那、セラフィムの全身から目も眩むような噴射炎が上がる。

緊急姿勢制御スラスター全出力解放。

泥濘を爆発させ、水面から巨体を跳ね上げた理不尽なまでの神業。

その直後、通信回線越しに信じられない音声 that 響いた。

『ん、あッ……！？ あ、あ……っ！♡』

甘く背徳的な雌の嬌声。

完全無欠の聖女が、死地でそんな声を漏らしたことに、レイスは一瞬息を飲んだ。

『くっ、は、ハァ……っ。レイス……わたくしは、まだ……負けません……こと、よ……ッ！』

血を吐くような喘ぎ声を残し、イラストリアスは黒煙を曳いて煤煙の彼方へと消えていった。

片腕を失い、推進剤とプラズマを血のように垂れ流す満身創痕の機体を、執念のオルガ出力だけで無理やり空へと縫い留めてみせたのだ。

敵ながら背筋が凍るほどの、美しくも悍ましい撤退劇だった。

「待て……ッ！ 逃がす、かよ……っ！」

レイスは咄嗟にペダルを踏み込もうとしたが、機体は重い駆動音を漏らすだけで動かなかった。

無理な限界駆動と、57mm砲の凄まじい反動。機体の脚部は運河の汚泥に深く沈み込み、動力炉はオーバーヒートの激しい警告音を鳴らし続けている。

何より、レイス自身の肉体が深刻な脱力感（パラライズ）に支配されていた。致死量の絶頂の反動で、指一本満足に動かせない状態だった。

パノラマモニターの端では、狂乱したハウンドの群れと触手マーメイドが再びこちらへ矛先を向けようと蠢（うごめ）き始めている。

エコーズの不吉な歌声は、未だ戦場を支配したままだ。

再起動を急がなければ、今度こそ自分が泥の底へ引きずり込まれる。

だが、死地に取り残されたレイスの口元には、狂気じみた笑みが張り付いて離れなかった。

「は、ハハ……っ。やっとだ。……やっと、お前に傷をつけたぞ……！」

レイスは震える手で、ようやく操縦桿を握り直した。

密閉されたコックピット内は、限界まで出力を絞り出したシステムの廃熱と、彼女自身の肉体が放つ濃厚な熱気で呼吸さえ困難なほどに澱んでいる。

パイロットスーツは汗と大量の愛液で無様に張り付き、股間に埋め込まれたデバイスの残響が、未だに彼女の神経を執拗に突き上げ続けていた。

生体反応スキャナーには、敵の異常なパルス波形の崩壊が記録されていた。

イラストリアスの神経が『性感過敏性』の限界を超え、サイコ・ミューの過負荷によって回復不能なレベルまで焼き切れた事実を、無機質に物語っている。

「あ、あぁ……っ、あは……♡」

宿敵に一矢報いた絶頂感（カタルシス）がシステムの電気信号と混ざり合い、レイスの奥底を最後の一突きで蹂躪した。

どろりと溢れ出した熱い液体がシートを汚し、彼女の赤い瞳に、さらに深く暗い執念の炎が燃え盛る。

だが彼女はまだ知らなかった。

この勝利がイラストリアスから唯一の「救い」さえ奪い去り、再会が救いようのない地獄になるということを。

機体設定資料:『黒鋼の執念』



1. NTA-501 タイラント(量産標準仕様 / 過去編)

5年前のレースおよび僚機が搭乗していたモデル。

- 機体コンセプト:「移動砲台」
- 【背部兵装】75mm 二連装滑腔砲(ツイン・カノン)
 - 破壊力と面制圧に優れるが、弾速が遅く対空には不向き。
- 【腕部兵装】30mm アサルトガトリング ×2
 - 両腕に装備された標準的な機関砲。
- 【近接兵装】高周波振動ブレード(Mk.1)
 - 腰部ラッチに懸架された実体剣。リーチが短く、高機動機には当てることすら困難だった。
- 【防御】黒鋼(クロガネ)複合装甲
 - 物理的な厚みで耐える重装甲。関節部などの可動域にある「隙間」が弱点。